

-資料をもとに小道具を作ってみよう-

代表者 3C 成田 菜央
指導者 濱松 崇子

はじめに

鹿角にはたくさんの伝説や伝承がある。佐多六とシロ、錦木塚物語、だんぶり長者物語、八郎太郎物語、猿の嫁になった娘などだ。鹿角の地名、神社仏閣の由来や歴史を知る上でどれも興味深い。

今回私たちが取り上げた「芦名沢の観音様」は、十和田高校にもほど近い場所に伝わる悲恋の物語だ。

I テーマ設定の理由

数ある伝説から私たちは「芦名沢の観音様」の昔話を題材に選んだが、ただ研究し発表するだけに留まらず、時代背景を調べた上で自分たちで脚本を考え、小道具を製作し、それを演劇で表現しようと考えた。複数の切り口ではあるが、それぞれの分野で得た情報や研究内容を共有し、一つの演劇作品にしたい、そしてこの物語を皆に伝えたいと考え設定した。

II 実施計画

- (1) オリエンテーション、時代考証…3 h
- (2) 脚本づくり講習会…1 h
- (3) 配役、脚本読み合わせ…3 h
- (4) 小道具づくり…4 h
- (5) 演技練習…4 h
- (6) 発表会

III 調査・研究内容

【あらすじ】奈良時代の天平宝字年間(757～764)、鹿角の砂沢(現在の山根地区)に、豪族(市兵衛)の娘(芦名姫)と長者(孫七)の息子(孫八)が恋に落ちる。が、親同士仲が悪いため許しが得られず密かに会う日々。ある時、市兵衛が機転を利かせて二人を遠くに逃がしたが、身代わりに馬2頭を生き埋めにし墓を建て、二人を死んだことにした。その後旅先で孫八は病死してしまったが、芦名姫がこの地に戻り、孫八と馬2頭を供養したという。その場所は後に芦名沢観音堂を経て芦名神社になったという。。※演劇に使用した物語は、一部フィクションにしました。

- (1) 時代考証では、DVDでNHK制作のドラマ(『大仏開眼』『炎立つ』)を、佐藤美准先生(日本史)の解説付きで鑑賞した。必要になりそうな衣装や道具などピックアップし、スケッチした。



↑『大仏開眼』の1シーン

- (2) 脚本づくりは主に講座18が担当したが、演劇を楽しむ会の高木豊平先生をお呼びした際には、小道具班、時代背景班もイメージを膨らませるため参加した。
- (3) 配役は生徒の適性や性格を考慮して担当教諭で話し合い決定した。

【配役】

豪族：市兵衛…成田大地
長者：孫七…長田周悟
豪族の娘：芦名姫…成田菜央
長者孫七の息子：孫八…中村康平
家来A…畠山香
家来B…関真那加
孫七の家来…栗木絵美奈
生徒A…藤田希望
生徒B…成田綿
生徒C…橋野亜里沙
生徒D…菅原桃音
黒子A…長内星空
黒子B…吉田雅
※講座番号17、18の生徒を含む

(4) 小道具づくりでは、かつての十和田高校演劇部の部室から使えるものを選別し、足りないものは段ボール等で制作。(うちわ、絵馬、本、墓)制作を進めるにつれて演劇への意識も高まっていくのを感じた。

(5) 演技練習では、読み合わせだけでも生徒の個性が十分感じられるものだった。全員素人ながら、演ずる要素も持ち合わせているようだ。誰もが演劇に慣れている訳でないが、それを強みに言いたいことを言い合い、主張し合うことでよい舞台に仕上がっていった。

IV おわりに

発表会を終えて、「演劇」というには未熟で未完成なところが多く、見苦しい点が多々あった。しかし演技の練習を重ねる度に、私たちは普段触れることのない時代に思いを馳せ、イメージーションを働かせることができた。そして全員で一つの演劇を作り上げていく過程や、観客の反応を舞台で感じる快感を味わうことができたと思う。「芦名沢の観音様」という十和田高校生にとって身近な題材を取り上げ、神社の由来やこの地域と馬との関係性を知ることにつながり、より地域に親近感を持つことができた。この経験を将来、それぞれの人生の舞台で役立てられたら本望である。



～衣装や小道具について・生徒のメモやスケッチから～

- 《豪族・豪族の娘》・華やか、色が鮮やか、華やかでキラキラした服装
 - ・あぐら・ピンクなどの明るい色遣い
 - ・上に薄い羽織り物
 - ・靴のつま先がとがっている
 - ・金や銀などの豪華な格好である
 - ・前髪を横に流している
 - ・髪が長く後ろで1つ結び
- 《長者・長者の息子》・黒いかぶり物
- 《庶民》・くすんだ色、質素、地味な色
 - ・白の着物みたいなもの
 - ・頭に白などの布を巻く
- 《その他》・明かりはろうそく、寒さ対策で火鉢、座るところだけ畳をしく

